Nagoya City University

高校生・大学生の親になることへの意識調査

中嶋　律子[1)]・北川眞理子[1)]・小笠原昭彦[2)]・神田　真愛[3)]・植松　みほ[4)]
安藤　えみ[5)]・鈴木理美子[6)]・中野あゆみ[7)]・長谷川　綾[8)]・近藤　晴子[1)]

High School and University Students Readiness for Parenthood

NAKAJIMA Ritsuko[1)], KITAGAWA Mariko[1)], OGASAWARA Akihiko[2)], KANDA Mai[3)], UEMATSU Miho[4)], ANDO Emi[5)], SUZUKI Rimiko[6)], NAKANO Ayumi[7)], HASEGAWA Aya[8)] and KONDO Haruko[1)]

キーワード: 子育て、親役割、青年期
Key words : childbearing, parenthood, adolescence

1. はじめに

人は妊娠・出産により、生物学的には「親」となる。しかし、必ずしも心理社会的にも「親」になっているとは限らない。エリクソンは、成人期の心理社会的危機を「生殖性と停滞」とし、「その関心が自分自身の子孫に向かない人もいる」としながらも、生殖性を「次の世代を確立させ導くことへの関心である」と述べている[1)]。こどもたちが次世代を育てることに関心をもつこと、心理社会的にも親になることは、成人期の課題となる。そして、この心理社会的な発達は、成人期になって急におこるわけではない。中西らは、乳幼児と接触経験や保育に関する学習経験などが、「親になることへの準備状態」の形成に影響を与えるとしている[2)]。しかし、少子化の現代においては、乳幼児と接触する機会は少ないのが現状である。

このような現状のなか、新しい生命の誕生や育児を援助する助産婦にとって、親になる人たちに心理社会学的にも親となれるよう、その発達を促す援助は不可欠となりつつある。そこで、親になる前段階にある世代への援助のあり方を検討する資料を得るため、高校生、大学生の親になることへの意識について調査した。

2. 目　　的

本研究の目的は、以下の3点である。

(1) 高校生、大学生の親になることへの意識を明らかにする。
(2) 高校生、大学生と現在子育て中の親の親になることへの意識の違いを明らかにする。
(3) 子どもとの接触経験が高校生、大学生の親になることへの意識に及ぼす影響を明らかにする。

3. 方　　法

1）調査方法

自己記入式の調査用紙を用い、留め置き法による調査を行った。調査内容は、家族構成、乳幼児との接触経験、親になることへの意識であった。親になることへの意識については、牧野らの「親になることへの準備状態」測

1）名古屋市立大学看護学部（助産学）、2）名古屋市立大学看護学部（心理学）、3）厚生連海南病院、4）名古屋第一赤十字病院、5）羽島市民病院、6）聖霊病院、7）加藤産婦人科病院、8）名古屋市立大学病院
1) Nagoya City University School of Nursing (Midwifery), 2) Nagoya City University School of Nursing (Psychology), 3) Kainan Hospital, 4) Japan Red Cross Nagoya First Hospital, 5) Hashima City Hospital, 6) International Holy Spirit Hospital, 7) Kato Hospital, 8) Nagoya City University Hpspital

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表1 「親になることへの意識」に関する質問事項

1	赤ちゃんを見ているだけで楽しくなる
2	赤ちゃんの泣き声が耳障り
3	小さな子どもに興味がある
4	子どもがうるさくしているとイライラする
5	小さな子どもと遊ぶのが好き
6	小さな子どもの相手をするのはつまらない
7	赤ちゃんを見ると抱きしめたくなる
8	赤ちゃんの子守りをするのはおもしろい
9	私はよい親になれると思う
10	私は子どもを育てたくない
11	赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う
12	赤ちゃんのおむつを替えるのは嫌だ
13	子どもを扱う職業につきたいと思うことがある
14	新聞などの子育てに関する記事をよく読む
15	小さな子どもは親の言うことに従うべきだ
16	子どもは人格をもった存在である
17	子どもは男女が協力して育てるもの
18	子育ては人と人のつきあいである
19	子育ては毎日毎日同じことの繰り返しである
20	子どもの成長のしかたを知ることは大切だ
21	子どもを育てている間、親は自由な時間が減る
22	子どもを育てると親も成長する
23	父親より母親のほうが子どもを育てるのに向いてる
24	親は子育てを通して社会にも目を向けるべきだ
25	子育ては楽しいものだ

定尺度[3]をもとに作成した「親になることへの意識」に関する尺度を用いて調査した。尺度の作成にあたっては、牧野らの尺度を用いて実施したプレテストの結果をもとに、質問がわかりにくい項目を削除し、プレテストの自由記述で得られた項目を追加した。質問項目は、表1に示した、乳幼児に対する感情や認知、子育てに関する行動や感情、認知、親になることに関する感情や認知に関する25項目である。回答形式は、牧野らの設定した「はい・？・いいえ」では、「？」に回答が集中したことから、「全然そうではない」（1点）から「非常にそのとおり」（4点）の4段階からなる順位尺度とした。クロンバックのα係数は0.82であった。

調査に際しては、調査用紙配布時に、調査への協力は自由であること、調査に同意する場合のみ用紙を提出するよう説明し、調査用紙の回収をもって調査への同意を確認した。また回収にあたっては、プライバシーに配慮し、対象者自身が用紙を封筒に入れ、封をしたものを回収した。

2）調査対象

対象は、愛知県内のA高等学校に通う2年生の男女287名、大学生ならびに短期大学生の男女104名、現在子育て中の男女240名。現在子育て中の男女については、大阪府下ならびに京都府下にある3施設の産婦人科外来を受診した40歳未満の女性とその夫とした。

子育て中の親については、親子関係は子どもの年齢によって、特に思春期以降に、変化する[4)5)]ことや、親自身が親になることによって人格発達をきたす[6)]ことから、本調査では、13歳未満の子どもの親に限定した。このことから、子どもの年齢を考慮して、対象の年齢を40歳未満とした。

3）調査期間

1998年10月から11月と、1999年4月。

4）分　　析

「親になることへの意識」に関する尺度の各項目の点数をt検定し、高校生・大学生と子育て中の親を比較した。さらにこの尺度の結果を、バリマックス回転を加えて主因子法で因子分析し、高校生・大学生と親を比較した。子どもとの接触が親になることへの意識に及ぼす影響の検討については、高校生・大学生を乳幼児との接触経験の有無で2群に分け、「親になることへの意識」に関する尺度の点数を因子ごとに合計し、それぞれにt検定を行った。統計学的な処理には、統計ソフトSPSS Ver. 10.0を用いた。

4. 結　　果

回収数と回収率は、高校生287名（100%）、大学生104名（80.0%）、子育て中の親109名（45.4%）であった。回収した調査用紙のうち、まず、子どもの年齢が13歳以上の親21名を除外し、さらに未回答項目のあるものを除いて、分析対象とした。分析対象数は、高校生281名、大学生96名、子育て中の親76名であった。有効回答率は、高校生97.9%、大学生92.3%、子育て中の親86.4%であった。それぞれの男女の内訳、平均年齢等は表2に示した通りであった。

「親になることへの意識」の各項目ごとの点数を図1に示した。子育て中の親と高校生・大学生を比較した結果、「子どもがうるさくてイライラする」「私はよい親になれると思う」「子どもを扱う職業につきたいと思うことがある」「子どもは男女が協力して育てるもの」「子どもの成

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表2　対　　象

		高校生 (n=281)	大学生 (n=96)	子育て中の親 (n=76)
内　訳	男性	140 名 (49.8%)	41 名 (42.7%)	15 名 (19.7%)
	女性	141 名 (50.2%)	55 名 (57.3%)	61 名 (80.3%)
年　齢（平均±SD）		16.59±1.01 歳	20.32±0.88 歳	31.17±4.68 歳
子どもの数（平均±SD）				1.53±0.60 人
第1子の平均年齢（平均±SD）				4.33±3.63 歳

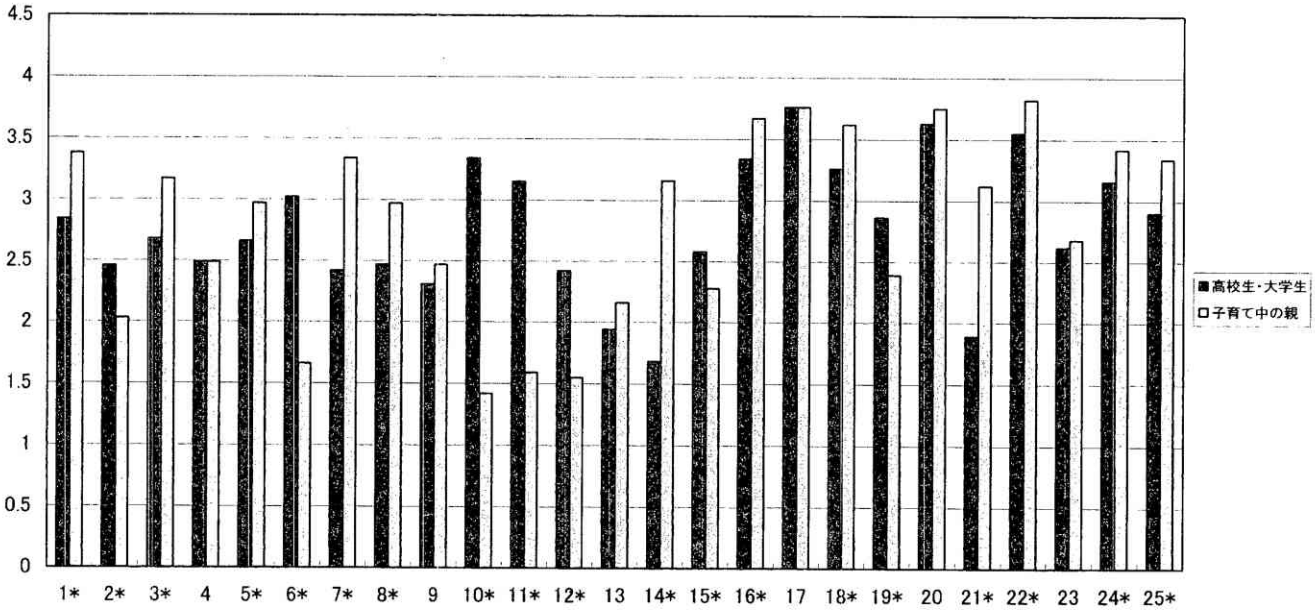

図1　「親になることへの意識」の質問項目別にみた得点の比較　　* p＜0.05

長のしかたを知ることは大切だ」「父親より母親のほうが子どもを育てるのに向いている」、の6項目以外で有意差がみられた。「子どもは男女が協力して育てるもの」「子どもの成長のしかたを知ることは大切だ」では、双方が高得点を示していた。

さらに、「親になることへの意識」に関する尺度を因子分析した結果を表3、表4に示した。高校生と大学生それぞれに因子分析を行ったところ、因子の構成に違いがなかったので、高校生と大学生を統合させて子育て中の親と比較した。子育て中の親、高校生・大学生双方で5因子が抽出された。共通していた因子は「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」「拒否」の3因子で、「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」の2因子では、因子を構成している項目もほぼ一致していた。子育て中の親では、子育てへの拒否に関連した因子と否定的なイメージに関連した因子に分かれたのに対し、高校生・大

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表３　「親になることへの意識」の因子分析結果（13歳未満の子どもを育てている親の場合）

項　　目	因子負荷量					因子名
小さな子どもに興味がある	0.796					子ども好き
赤ちゃんの子守りをするのはおもしろい	0.787					
小さな子どもと遊ぶのがすき	0.772					
赤ちゃんを見ると抱きしめたくなる	0.762					
赤ちゃんを見ているだけで楽しくなる	0.706					
子育ては楽しいものだ	0.496					
小さな子どもの相手をするのはつまらない	−0.631					
赤ちゃんの泣き声が耳障り	−0.52					
子どもがうるさくしているとイライラする	−0.488					
子育ては人と人のつきあいである		0.724				子育てによる社会性の発達
子どもの成長のしかたを知ることは大切だ		0.662				
子どもを育てると親も成長する		0.641				
子どもは男女が協力して育てるもの		0.625				
新聞などの子育てに関する記事をよく読む		0.614				
子どもは人格をもった存在である		0.548				
親は子育てを通して社会にも目を向けるべきだ		0.463				
私は子どもを育てたくない			0.71			拒否
赤ちゃんのおむつを替えるのは嫌だ			0.696			
赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う			0.655			
小さな子どもは親の言うことに従うべきだ			0.626			
子育ては毎日毎日同じことの繰り返しである				0.675		否定的イメージ
父親より母親のほうが子どもを育てるのに向いてる				0.63		
子どもを扱う職業につきたいと思うことがある					0.515	その他
私はよい親になれると思う					0.504	
子どもを育てている間、親は自由な時間が減る					−0.646	
累積寄与率	18.635	30.506	40.796	48.055	54.487	

学生では１つの因子となっていた。

次に、子どもとの接触経験と親になることへの意識との関係について分析した。子どもとの接触経験は、「赤ちゃんを抱いたことがあるか否か」「きょうだいや親戚の子どもの世話をした経験があるか否か」「小さな子どもと遊んだ経験があるか否か」の３種類に分けて質問した。まず、子どもとの接触経験に関する結果を図２に示した。「赤ちゃんを抱く」「小さな子どもと遊ぶ」では、全然ない、あまりないと経験のないものが約半数であったのに対し、きょうだいや親戚のこどもの世話になると、少しある、かなりあると答えたものの合計が、72.1％と経験のあるもののほうが多くなっていた。この接触経験に関する質問に、「全然ない」「あまりない」と回答したものを「経験なし群」、「少しある」「かなりある」と回答したものを「経験あり群」とし、因子分析によって抽出された因子ごとの合計点を２群間で比較した。その結果、表５のような結果が得られた。３つの経験項目ともに、「子ども好き」因子の点数が経験あり群で有意に高くなっていると同時に、「拒否」因子でも、経験あり群のほうが有意に点数が高くなっているという結果を示していた。その他には、きょうだいや親戚の子どもの世話をしたことがある群では「親になることへの自己認識」因子の点数が高く、小さなこどもと遊んだ経験のある群で、「子育てへの関心」因子の得点が高くなっていた。

5. 考　　察

親になることへの意識について高校生・大学生と、子育て中の親を比較した結果、全体的に、親のほうが点数が高くなっていたことは、子育て中の親が、青年期の発達を遂げている[1]ことに加え、子育てによって親自身に人格の発達がおこった[6]結果であると考えられる。「子どもは男女が協力して育てるもの」「子どもの成長のしかたを知ることは大切」の項目で有意差がみられなかったことについては、子育てに関する一般論として、高校生からすでにそのように認識されていることが考えられる。

次に、「拒否」因子における項目の違いは、親では、実際の子育てを通して拒否感を抱く事柄が具体化しているの対し、高校生・大学生では、子育てに対して抱いてい

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表4　「親になることへの意識」の因子分析結果（高校生・大学生の場合）

項　目	因子負荷量					因子名
*赤ちゃんを見ているだけで楽しくなる	0.805					子ども好き
*小さな子どもと遊ぶのが好き	0.79					
*小さな子どもに興味がある	0.787					
*赤ちゃんを見ると抱きしめたくなる	0.773					
*赤ちゃんの子守りをするのはおもしろい	0.743					
*小さな子どもの相手をするのはつまらない	0.707					
子どもを扱う職業につきたいと思うことがある	0.62					
赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う	0.568					
*子育ては楽しいものだ	0.556					
*子どもは男女が協力して育てるもの		0.696				子育てによる社会性の発達
*子どもを育てると親も成長する		0.678				
*子どもの成長のしかたを知ることは大切だ		0.635				
*子育ては人と人のつきあいである		0.558				
*子どもは人格をもった存在である		0.537				
*親は子育てを通して社会にも目を向けるべきだ		0.505				
子どもがうるさくしているとイライラする			0.686			拒否
赤ちゃんの泣き声が耳障り			0.618			
*赤ちゃんのおむつを替えるのは嫌だ			0.508			
子どもを育てている間、親は自由な時間が減る			0.483			
父親より母親のほうが子どもを育てるのに向いてる			−0.475			
*小さな子どもは親のいうことに従うべきだ			0.45			
子育ては毎日毎日同じことの繰り返しである			0.439			
私はよい親になれると思う				0.767		親になることへの自己認識
私は将来子どもを育てたくない				0.689		
新聞などの子育てに関する記事をよく読む					0.728	子育ての関心
累積寄与率	21.594	31.532	40.964	48.013	53.164	

*印は子育て中の親と一致している項目を示す

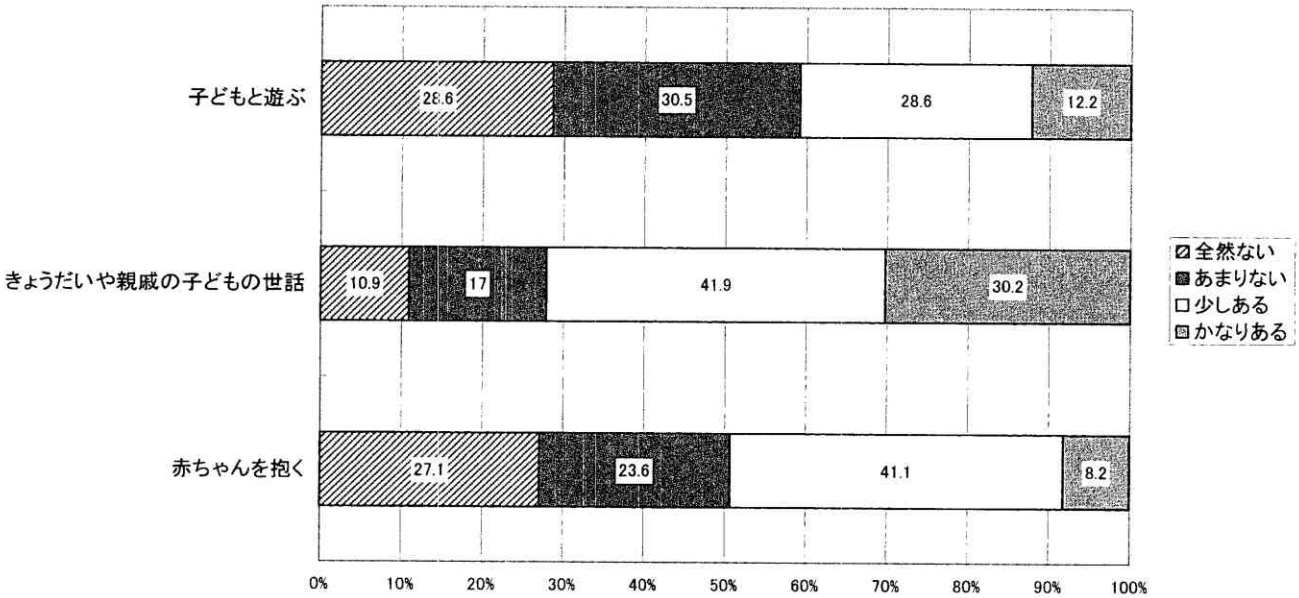

図2　子どもとの接触経験

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

表5 「親になることへの意識」の因子別得点の比較（子どもとの接触経験の有無による比較）

	赤ちゃんを抱く		きょうだいや親戚の子どもの世話		子どもと遊ぶ	
	経験あり群（n=186）	経験なし群（n=191）	経験あり群（n=272）	経験なし群（n=105）	経験あり群（n=154）	経験なし群（n=223）
「子供好き」因子（平均±SD）	** 25.74±5.65	22.47±5.89	** 25.33±5.62	20.86±5.74	** 26.43±5.72	22.47±5.64
「社会性の発達」因子（平均±SD）	20.76±2.41	20.63±2.40	20.79±2.27	20.45±2.71	20.83±2.45	20.60±2.36
「拒否」因子（平均±SD）	* 17.85±2.77	16.80±3.20	** 17.68±2.88	16.37±3.22	** 18.10±3.02	16.78±2.93
「親になることへの自己認識」因子（平均±SD）	5.70±1.35	5.61±1.28	** 5.80±1.25	5.29±1.41	5.78±1.22	5.56±1.37
「子育てへの関心」因子（平均±SD）	1.74±0.78	1.62±0.69	1.70±0.72	1.64±0.80	1.80±0.76	* 1.60±0.72

** $p<0.01$　* $p<0.05$

るイメージがもとになっているためと考えられる。また、高校生・大学生では、子どもとの接触によって、子どもが好きになる反面、子どもや子育てへの拒否も起こっていることがわかった。このことは、子育て中の親は、赤ちゃんの泣き声が耳障りとか、子どもがうるさくしているとイライラするのは、子ども好きに関連しているしているのに対し、高校生・大学生では、子育てや子どもへの拒否と関連していることから、子どもと接した時の状況によって、その経験がかえって、親になることへの拒否につながる危険性をもっているのではないかと考えられる。

今回の結果から、高校生や大学生の世代の、親になることへの心理的な準備状態を高めるためには、子どもとの接触が有効であると考えられる。しかし、経験した内容によっては、拒否にもつながるという危険性をもっているため、子どもが好きになるとか、子育てへの関心を高めるということを目的として、子どもとの接触を思春期教育に取り入れる場合、十分な注意が必要であると考えられる。また、子育てについて、想像のみで悪いイメージを持たせる可能性や、良い部分だけしか認識させない可能性をもっていることが考えられた。しかし実際に子育てをするには、どちらも子育てや子どもへの拒否をもたらす危険性があるため、子育ての様々な面を知る機会を提供し、その中で自分自身で子育てというものを考え、将来を計画できるようにすることも必要ではなかいと考える。

今回の調査では、子育て中の親の数が少なく、男女比にも偏りがあった。今後この点を補った上でさらに検討する必要があると考えられる。また、子どもと接した経験の内容をさらに細かく分類して、親になることへの意識との関係を明らかにすることで、思春期教育に子どもとの接触を取り入れることの有効性などが明らかになるのではないかと考える。この点についても、さらに追加の調査を行い検討を加える必要があると考える。

6. まとめ

親になることへの意識について調査した結果、子育て中の親と高校生・大学生では、ほぼ同じ因子で構成されていることがわかった。また、高校生・大学生では、子どもと接した経験がある場合のほうが子ども好きになる反面、子どもや子育てへの拒否的な気持ちも生じていることが明らかになった。これらのことから、親になることへの意識を高めるためには、子どもとの接触の経験が有効であるが、その場合、拒否的な気持ちを生じさせないよう注意して進めなければならない。今後、さらに、子どもと接した程度や内容の具体化を図り、親になることへの意識を高めるための援助方法としての、子どもとの接触の活用方法等について検討する必要がある。

7. 謝辞

調査にご協力下さいました対象者の方々、石田病院成本勝彦先生、足立病院畑山博先生、池田産婦人科池田聡

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

明先生に謝意を表します。

8. 文　　献

1）Erikson E. H.:Childhood and Society (2nd ed.),W. W. Norton, New York,1963, 仁科弥生訳, 乳幼児期と社会Ⅰ, 343－345, みすず書房, 東京, 1977.
2）中西雪夫, 牧野カツコ：高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育（第2報), 日本家庭科教育学会誌, 32 (2), 55－59, 1989.
3）牧野カツコ, 中西雪夫：高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育（第1報), 日本家庭科教育学会誌, 32 (2), 51－53, 1989.
4）山本誠一：思春期・青年中期の発達と人間関係, 看護場面に学ぶ発達臨床心理学（後藤宗理編著), 118－127, 樹村房, 東京, 2000.
5）桐山雅子：青年後期から成人前期の発達と人間関係, 看護場面に学ぶ発達臨床心理学(後藤宗理編著), 132－142, 樹村房, 東京, 2000.
6）柏木恵子, 若松素子：「親になること」による人格発達 生涯発達的視点から親を研究する試み, 発達心理学研究, 5, 73－83, 1994.

要　　約

親になる準備段階にある高校生・大学生の親になることへの意識と、子どもとの接触経験が親になることへの意識に及ぼす影響について明らかにするため、高校2年生男女287名、大学・短大生男女104名、現在13歳未満の子どもを育てている男女240名を対象に質問紙調査を行った。その結果、高校生・大学生では、親になるという意識は、「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」「拒否」「親になることへの自己認識」「子育てへの関心」の5因子から構成されていること、「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」では、子育て中の親とほぼ同じ構成になっていることがわかった。「拒否」についても、親の「否定的イメージ」と「拒否」を統合させた構成になっていた。高校生・大学生の子どもとの接触の経験は、親になることへの意識のうち、「子ども好き」の要因を高めている反面、「拒否」の気持ちも生じさせていることが明らかになった。

（平成12年11月30日受稿）
（平成13年1月16日受理）

NII-Electronic Library Service